

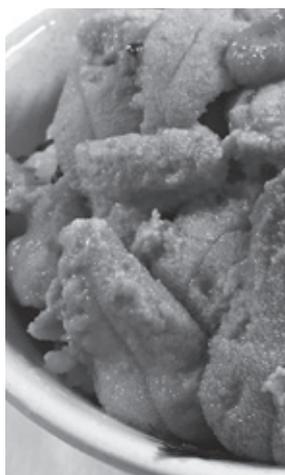
東日本大震災 大口町の復興支援

平成23年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖にM9.0という、日本観測史上最大の地震が発生しました。これにより巨大な津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害を及ぼしました。いわゆる東日本大震災です。

早いもので、この震災からこの3

東日本大震災 発生から6年

大口町は、東日本大震災発生後の平成24年4月より、大口町の人口約2万人と規模がほぼ同じ南三陸町へ毎年職員を1名派遣しています。今回の特集では、現在、6人目の派遣職員として南三陸町役場に勤務している大塚剛司さんに、6年たった現在の復興の様子を伺いました。



新南三陸さんさん商店街



志津川湾夏まつり

月で丸6年がたちます。昨年も、日本ではたびたび大きな地震が発生しました。4月14日の熊本地震、10月21日の鳥取県中部地震などは記憶に新しいでしょう。もはや、いつどこが大きな震災に見舞われてもおかしくないというのが日本国民の共通認識であり、各自治体が全力で減災対策に取り組み、人々の間にも防災に対する意識が年々高まっています。

東日本大震災の被災地の一つである南三陸町で実際に生活しながら約1年職員として勤務した大塚さんに、貴重な体験談を伺いました。

まずは、現在の南三陸町の復興の様子を教えてください。

南三陸町の沿岸部では、今も復旧工事がおこなわれ、日々忙しく建設重機が煙をあげ、町内の道路を大型ダンプトラックが行き来しています。それでも、沿岸部にあった住宅街を

高台に移転する「防災集団移転」は、宅地造成工事が90%以上完了し、土地の引渡しがおこなわれています。その土地には、戸建て住宅が再建され、すでに新たな環境で生活を始めています。また、災害公営住宅も完成し、希望する町民の方々が入居しています。

また、南三陸町地方卸売市場が完成し、漁業分野の復興が大きく進んだほか、海水浴場「サンオーレ袖浜」の復旧工事がおこなわれ、高台の上には新たな商店街（南三陸さんさん商店街）が建設され、3月3日には新規オープンする予定です。さらには、三陸縦貫自動車道「志津川インターチェンジ」が開通したことで、町の賑わいと生業を取り戻す速度に加速がついたのではないかと感じています。

「南三陸さんさん商店街」が、今月オープンすることは、年末の全国ニュースで明るい話題として流れ、復興の新たな一歩を実感しました。町民の皆さんも、まだまだご不便はあるでしょうが、少しずつ元の生活に戻りつつあるのでしょうか？

震災後6年近く仮設住宅など、震災前の「家」とは全く違う環境で生活していた皆さんが、住宅を再建し

今もなお かさ上げ工事が 進む南三陸町



南三陸町地方卸売市場



志津川湾夏まつり

たり、災害公営住宅に入居したり、震災前の住環境を徐々に取り戻しつつあります。

しかし、町内にはまだ生鮮食品を販売するスーパーなどの大型店舗がなく、隣の気仙沼市や登米市、石巻市などに出向いて食材を買いだめしているそうです。震災から間もなく6年を迎えますが、南三陸町で生活している皆さんは、今でも不便な生活を送っています。

「大塚さんも現地でも大きな揺れを感じたことがあるそうですね。11月22日の5時59分に福島県沖で震度5弱の地震が発生し、東北地方の太平洋岸一帯に津波警報や津波注意報が発令されました。そのとき何をしています、どんな行動を取りましたか？状況を詳しく教えてください。」

あの日、緊急地震速報を伝える携帯電話が静かになったところに、ゆっくりとした大きな横揺れを感じました。最大震度5弱、アパートがある登米市は

震度4、南三陸町は震度3と地震規模を確認したと同じ頃に、福島県に津波警報、宮城県に津波注意報が発令されました。

「まずは自分の身の安全を確保すること」を第一に、役場へ向かおうと決めました。カーラジオで常に最新の情報を確認しながら、役場へと向かいました。カーラジオでは、福島県などで「若干の海面変動」や「50cm到達」などと聞こえてきたので、可能な限り高い位置の道路を走りました。

けたたましいサイレンとともに津波警報の放送が防災無線から流れたのは、役場に到着してしばらく経ってからのことでした。

11月22日の地震・津波警報を経験して、まずは、「冷静かつ迅速に自分の身の安全を守ること」が最も重要だと感じました。

その場に留まることが安全なのか、それともその場から逃げるのが安全なのか。瞬時に判断するためには、日頃から自分の行動パターンに応じた安全な場所を意識しておくことが必要だと感じました。

「普段から、有事の行動パターンをシミュレーションしておくことが、いざというときの冷静な判断につながるということですね。」

被災地で勤務して、大塚さん自身の防災意識は変わりましたか。災害への備え、または被災した後の生活で大切だと思ったことは何ですか？

震災を経験した皆さんから、当時のお話を聞くことができ、多くのことを学びました。やはり「まずは自分の身の安全を守ること」これに尽きると思います。そして、自分の身を守ったあとは、周囲の人たちで困難な状況にある人を助けよう。そうして助かった命も少なくないと思っています。震災への備えとして、日頃から隣近所の

人たちとコミュニケーションをとり、いざというときにはお互いに助け合える関係を築いておくことが大切であると感じました。

「地域のコミュニケーションの大切さについては、震災後、たびたびメディアでも取り上げられ、いろいろな自治体での積極的な取り組みが紹介されたりしています。いざというときに助けてくれるのは行政や警察、消防よりも隣近所。この考え方が随分と浸透してきたように思います。

昨年も、熊本や鳥取でも地震がありました。南三陸の方たちは他地域の被災地のことをどのように話題にされていきましたか？

南三陸町からも、熊本県や鳥取県の被災地に、短期的に職員を派遣していました。震災を経験したからこそ、被災地に伝えられることがあると思います。

また、熊本県や鳥取県からも南三陸町で職務にあたっていらっしゃる方もいらっしゃるようです。町の人たちは、自分のごとくのように心配されていたことがとても印象に残っています。

「全国的に助け合いや絆の輪が広がっていますね。私たちが復興に向けて少しでも支援できることはあるでしょうか？」

あの震災により、南三陸町を含め三陸沿岸地域は、壊滅的な被害を受けました。そして多くの尊い命、財産が失われ、多くの人々が明日の生活も見えなくなってしまう。そんな中でも、前を向き、復興に向けて進んでいる人々が東北にいるというのを忘れないでください。

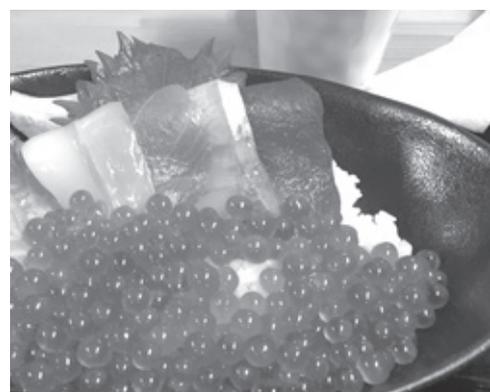
そして、大口町の宿泊助成「リフレッシュリゾート」を利用して南三陸町を訪れていただき、一歩ずつ着実に復興している南三陸町と三陸沿岸地域を肌で感じていただくことが、支援につながるのではないかと思います。

「南三陸町に観光に行くとしたら、どこがおすすめですか？」

やはり、南三陸町へお越しいただいたのであれば、海の幸を堪能していただきたいです。春はめか



▲民宿あおしま荘



▲キラキラ丼

ぶ、夏はウニ、秋から冬にかけてイクラやカキ、タコが美味しい季節です。おすすめの飲食店は松原食堂です。キラキラ丼はもちろんのこと、タコの中から揚げが絶品です。こだわりの魚介類をぜひ召し上がっていただきたいです。被災後、仮設のさんさん商店街で営業を続けていましたが、さんさん商店街の移設に伴い、今は休業されています。新しいさんさん商店街には入らず、店舗を再建して9月頃に再開を予定しているそうです。

また、「民宿あおしま荘」もおすすめです。和モダンな造りの建物で、旬な食材を使った食べきれないほどの料理を出していただけます。

私がお邪魔した8月には、山盛りの殻つきのウニやお刺身など、驚きの量でした。お土産としておすすめ



▲たつのこのり太郎

は、ちばのり店の味付けのり「たつのこのり太郎」です。パリッと厚めの上質なのりに、絶妙な味付けで、一度食べるとご飯が止まらなくなります。

また、オーイング菓子工房RYOの「お山のマドレーヌ」もおすすめです。宮城県出身のお笑い芸人がテレビ番組で紹介するほどの美味しさです。しっかりととした食感は絶品です。



▲お山のマドレーヌ

南三陸町は、想像もできない凄惨な状況から、着実に復興を遂げています。町の人たちは、前を向いて進んでいらつしゃいます。大口町からは決して近い距離ではありませんが、是非とも一度は訪れていただいで、町の元気を肌で感じていただきたいと思っています。

—大塚さんの現在の生活について伺います。大塚さんのように南三陸町へ派遣されている職員は何人いらつしゃるのでしょうか？

全国の市町村、北は北海道本別町、南は鹿児島県伊佐市から108名の職員が派遣されています。また、それとは別に、復興庁から6名、復興のため南三陸町が雇用している任期付職員が19名と、正規職員以外にも多くの職員が災害復旧事業をはじめ、福祉や観光、教育など町の業務全般に携わっています。

—大塚さんの職場のことを教えてください。

私は、南三陸町教育委員会教育総務課でお世話になっています。ここでは、転入学をする児童生徒の事務など、小中学校の事務を担当しています。教育総務課のメンバーは、教育長をはじめ男性6名、女性2名です。皆さんとても明るく、いつも楽

しい雰囲気です。業務にあたっています。8名のうち4名が、津波により家屋など大切な財産を失いました。女性2名は、つい最近までそれぞれ仮設住宅に入居していて、やっと高台に再建した新居で新たな生活をスタートされています。

震災のあの日、小学校で教師をされていた方が2名いらつしゃいます。

お一人は高台の上であり、直接的な津波被害はなかった小学校に勤めていらつしゃいました。立っていられない、今まで感じたことのない強烈な揺れに、ただ事ではないと感じたそうです。そこから見えた真っ黒な津波が町を飲み込む様子と響き渡るその音は、今もはっきりと覚えていると教えてくださいました。被災後、その小学校は避難所となりました。先生方は自分や家庭のことは顧みず、何日も泊まり込みで、避難所の運営に尽力されたそうです。

もう一人は、校舎屋上まで津波に飲まれた小学校に勤めていらつしゃいました。その小学校の防災マニュアルでは、津波の際は屋上に避難することとしていました。しかし、その年の避難訓練の際、地元に住む先生からは、本当に大津波が来た際には、屋上でも危険なため、すぐに裏山の神社に逃げるべきではないかと

いう意見が出されました。どちらが避難先としてふさわしいか、その結論は、次回の会議に持ち越しとなっていたそうです。

あの日、尋常でない揺れを感じたその小学校では、マニュアルに定められた屋上ではなく、すぐに裏山の神社に逃げることを選択しました。隣にあつた保育所の幼児たちとともに。

逃げた裏山の神社の境内では、児童たちを中心にして、先生や避難した大人たちで周囲を囲つたそうです。

津波は押し寄せるたびに高さを増し、ついにはすぐ近くの樹木が倒されていく程になり、もうダメだと死を覚悟したそうです。流されるときは、みんな一緒に、周囲の大人たちは手をつなぎ児童たちを囲つて身構えたころ、津波は高さを増すことなく、低くなつていったそうです。本当に寒かつたその夜は、今まで見たことのない、きれいな星空が広がっていたと教えてくださいました。

このように、今一緒に働いている皆さんもまた被災者で、想像を超えるほどの辛い経験をしていながら、震災後から今もずっと、町の復興のため従事されています。

取材にて

6年前に突然襲ってきた自然災害によって、貴い穏やかな日常生活を一時にして奪われた南三陸町のみなさん。現地の大惨事の様子は、ニュースの映像や写真でしか接する機会はありませんでしたが、大塚さんの現地のレポートにより、より鮮明に目の前に映し出されました。また、現在一歩一歩着実に復興が進んでいることがわかり、うれしく思うと同時に、少しでも早くみなさんが元の生活を取り戻されることを願つてやみません。

大塚さんが、「まずは自分の身は自分で守ること」とおっしゃっていたのが印象的でした。大切なのは日頃の備え。いつ何が起つてもできるだけあわてず行動できるよう、いざというときのコミュニケーションを普段からしておくことが重要だと改めて思いました。

お話の中にあつたとおり、南三陸町に観光に訪れ、自然や食べ物を楽しむことが支援につながります。

大口町では、町内にお住まいかお勤めの方に、南三陸町の宿泊助成をおこなつりフレッシュアッププログラム（生涯学習課）があります。ぜひ利用して現地へ観光に訪れてください。